

〈靈樞・四時氣第十九より〉令和2年3月の課題

○著痺不去、久寒不已、卒取其三里。

張介賓曰く、「痺論に曰ふ、濕氣勝れば著痺を爲すとは、其れ重なりて着せば動かし難し」と。故に去らざるを云ふ。若し寒濕あい搏つこと、久しくして已えざれば、當に猝すなわかに足陽明の三里を取るべし。胃氣を温補すれば則ち寒濕散りて、痺も愈ゆるべし。

『太素』は三里を里骨に作る。

楊上善曰く、「卒刺は燔鍼なりて、上經に準ず※。卒は當に焮たりて、痺を刺すの法なり。里骨は著痺と同里ある、おるの骨を謂ひ、名づけて里骨と曰ふ。以だ其の痺深き故に、此れを骨に取るなり」

※轉筋干陽、治其陽。轉筋干陰、治其陰、皆卒刺之。楊上善曰く、「六陽の轉筋は、即ち燔鍼を以て其の陽筋を刺す。六陰の轉筋も還た燔鍼を以て其の陰筋を刺す也」

○骨爲幹。

『太素』は「骨」字は上句に屬なり、「爲幹」二字は下句に屬す。

↓○著痺不去、久寒不已、卒取其里骨。

著痺去らず、久寒已えざらば、焮して其の里骨を取れ。(里骨は、著痺

のある部分の骨)

○爲幹腸中不便、取三里、盛寫之、虛補之。

張介賓曰く、「小腸便ならざれば、よく物を化する能はず。大腸便ならざれば、よく傳道する能はず。大腸小腸は皆胃に屬すが故に、當に足陽明の三里を取るべし。邪氣盛んなれば之を寫し、世氣虚すれば之を補う」

『太素』は首句を「爲幹腸中不便」に作る。

楊上善曰く、「幹とは蹶蹶なり。蹶、寒なれば脈を爲す、三里を取れ。補寫は要を爲すなり」

※脾(ふともも) 斬(コウ、すねの上部) 骸(コウ、すねの下部の細くなつた部分)

髀(カ、もの骨、ひざの骨、くるぶしの骨) 髀(カ、ひざの骨、腰骨)

髑髏(カツウ、胸骨)

膊(ハク、肩甲骨)

髀(グウ、肩関節の前面)

髀(カン、しりぼね)

→○髑たねをして脹はさしめ(寒邪による腫脹)、中(腹中)使たならざるは、三里を取れ、盛たかんなるは之を寫し、虚するは之を補せ。

○瘡風者、素刺其腫上。已刺、以銳鍼鍼其處、按出其惡氣、腫盡乃

止。常食方食、無食他食。

『太素』は「素」を「素」に作り、「鍼其處」を「允ちとおす、穴をあける(其處)に作る。

『甲乙經』は「素」を「素」に作り、「以銳鍼、鍼其處」を「以吮其處」に、「惡氣」を「惡血」に作る。

楊上善曰く、「素は蘇作の反(切)、散なり。瘡風の腫上を刺すなり。復た允頭の鍼で、以て其の所を允し已えれば、鍼を去り、手を以て之を按じ、其の惡氣を出せ。食は禁法の如くせよ」

※素と素は通ずる。「あれはた」「むなし」の意がある。

→○瘡風は、其の腫上を索ちめて刺せ(索ちらして刺せ)。刺し已えれば、銳鍼を以て其の處を鍼し、按じて其の惡氣を出せ、腫れ盡きれば

乃ち止む。常に方食(処方食)を食え、他食は食うこと無かれ。

○腹中常鳴、氣上衝胸、喘不能立、邪在大腸、刺胃之原、巨虛上廉、

三里。

張介賓曰く「九鍼十二原篇に曰く、盲之原は膀胱※に出づ、即ち任脈の下、氣海也」巨虛上廉、三里、皆、足陽明の經穴。按ずるに本輸篇に曰く「大腸の屬は上廉」と。此れ以て、邪、大腸に在るが故に、當に巨虛上廉を刺すべし。若し下文の邪、小腸に在れば則ち當に巨虛下廉を取るべきなり。

※脾映ホツオウニ氣海 脾項ニくび

『太素』は「盲」を「貫」に作る。

楊上善曰く、「大腸は手の陽明脈、肺を賂い膈を下りて大腸に屬す。故に、邪氣大腸に在れば、手の陽明脈を循り、胸を上り衝きて、久しく立つ能わず。賁は膈なりて、膈の原は鳩尾に出づ。巨虚上廉と大腸とは合し、以て足の陽明は上りて手の陽明に連なるが故に、巨虚上廉を取り、并せて三里を取るなり」

↓○腹中常に鳴り、氣上りて胸を衝き、喘ぎて立つ能わざるは、邪大腸に在り、賁之原(鳩尾)、巨虚上廉、三里を刺せ。

○小腸控臑、引腰脊、上衝心、邪在小腸者、連臑系、屬於背、貫肝

肺、絡心系、氣盛則厥逆、上衝腸胃、燻肝、散於盲、結於臍。

『太素』は「臑」を並べて「臯」に作り、「燻」を「動」に作る。

楊上善曰く「臯の音は高。小腸は脊を傳い、左に環りて積葉寸(靈・腸胃2寸)。其

れ廻腸に注げば齊上臑のあたりにて外へ傳わる。小腸の脈は心を賂い、咽を

循り膈を下りて胃に抵れ小腸に屬なる。故に臯系に連なるを得、脊に屬なり、

肝肺を貫き、心系に賂ふなり」

張介賓曰く「控は引なり。臑は陰丸なり。小腸は小腹に連なり、若し其の邪盛んなれば則ち厥逆し、下より上りて心肺を衝き、肝胃に燻じて、腰脊に引き、下りて盲臑系(鳩尾)臑(臑丸の系列)の間に及ぶなり。

↓○小腸は臑を控き、腰脊を引き、上りて心を衝く。邪、小腸に在れば、臑系に連なり、背に屬なり、肝肺を貫き、心系を絡う。氣、盛ん

なるときは厥逆し、上りて腸胃を衝き、肝を燻し、盲に散り、臍

に結ぶ。

○故取之盲原以散之、刺太陰以予之、取厥陰以下之、取巨虛下廉以

去之、按其所過之經以調之。

楊上善曰く「盲の原とは膀胱(氣海)なり。齊上(の近く)一寸五分なり」
張介賓曰く「盲の原を取りて之を散ずとは、臍腹の結を散ずるなり。太陰を刺し、以て之に予え、肺經の虚を補うなり。厥陰を取り以て之を下し、とは肝經の實を寫すなり。巨虛下廉を取り以て之を去るとは、小腸の屬なる所に求めるなり。其の過ぎる經を按ずる、とは其の邪の所在を察(擦)し、以て之を調うるを謂うなり」

↓○故に之を盲の原(氣海)に取り、以て之を散らし、太陰を刺して以て之に予え、厥陰を取って以て之を下し、巨虛下廉を取り、以て之を去り、其の過ぐる所の經を按じ以て之を調えよ。

○善嘔、嘔有苦、長大息、心中憺憺、恐人將捕之、邪在膽、逆在胃、

膽液泄則口苦、胃氣逆則嘔苦、故曰嘔膽。

張介賓曰く「憺憺とは心虚の貌なり。邪は膽に在り、逆は胃に在れば、木、土に乗ずるなり(剋) ※素問・陰陽別論では相生の逆を相乘という

楊上善曰く「長く大息すとは、大息激しい呼吸の長なることなり。膽熱の病は恐懼す、故に人の將に之を捕えられんとする如し。邪の膽に在りとは、熱邪、膽中に在れば、苦汁溢れ、胃氣は因って逆し、遂に膽(汁)を歐きて口苦し。名づけて膽痺と曰ふ」

↓○善ばしば嘔き、嘔に苦み有り、長に大息し、心中憺憺とし、將に人に捕えられんと恐るは、邪、膽に在り。逆は胃に在り、膽液泄れるときは口苦く、胃氣逆すときは苦みを嘔く。故に嘔膽と曰ふ。

○取三里以下胃氣逆、則刺少陽血絡以閉膽逆、却調虚實、以去其邪。

『太素』には「則」字なく、「少」の上に「足」有り、「却」字なし。

張介賓曰く「三里は足陽明の經穴、故に胃氣の逆を下すこと可なり。また少陽の血絡を刺し、以て其の本を平らかにすれば則ち、膽液も泄れず。故に以て膽逆を閉ずると曰ふなり。然り、必ず其の虚實を調え、或いは補ない或いは寫せば、皆、其の邪は以て去る可べし」

↓○三里を取り以て胃氣の逆を下し、(則)少陽の血絡を刺し以て膽部

太素を閉じ、(却た)虚實を調え、以て其の邪を去れ。

○飲食不下、膈塞不通、邪在胃脘。在上腕、則刺抑而下之、在下腕、

則散而去之。

楊上善曰く「邪、上管に在れば、胃の上口の穴を刺し、抑えて之を下せ。邪、下管に在れば、胃の下口の散穴を刺して、之を去れ」

張介賓曰く「上腕下腕は任脈穴なりて、即ち胃脘なり。刺し抑えて之を下すとは、上腕を刺して、以て其の食氣の高きに至るを寫すを謂うなり。散じて之を去るとは、下腕を温め以て其の停積せる寒滯を散らすを謂うなり。鍼も藥も、皆然り」

↓○飲食下らず、膈、塞りて通ぜざるは、邪、胃脘に在り。上腕に

在れば、則ち刺し抑えて之を下し、下腕に在れば、則ち散らして之

を去れ。